

# 後半ペース落ち 記録物足りず

マラソンのベストタイムが2時間23分24分台と同レベルの小原、サド、ジェプキルの先頭3人は、25キロまで5キロ17分前後のペースを維持して並走したが、それ以後は17分30秒50秒に低下。スピード持久力の不足があらわれ、記録には物足りないレースとなった。

小原は30キロ以降、何回かペースアップを試みたが、1キロ3分24秒28秒程度のスピードでは相手を離せず、その「仕掛け」による疲労が、わずかなペースダウンを引き起こして優勝を逃した。内心、勝てるかもしれないと感じた状況もあったと思われるが、1位になる難しさを体験したレースだっただろう。「殻を破る」という意識で臨んだレースでの意欲的な姿勢は、マラソンへの取り組み方のレベルアップを感じさせた。次のレースでの順位や記録

につなげてもらいたい。

日本人選手2位の中野は30キロ以後をうまくまとめ、自己ベストをマークして、MGCの出場資格を得た。課題は

## 豊岡示朗の目



先頭グループで走るためのスピードアップであろう。実績からみてMGC切符は確実と思われた福士は、途中棄権となった。潜在力は高く、早い復帰を望みたい。また、期待された大森と石井は2時間22分台を目指すペースメーカーの集団にくく積極性は見せたものの、力不足を感じさせた。設定されたマラソンペースでの持久力養成が課題となろう。

本大会の結果は、リオデジャネイロ五輪前から強調されてきた中間点から

の後半をスピードアップするという「ネガティブスプリット」という走り方に程遠く、世界レベルとの差も明らかになってしまった。また、好タイムを目指す目的で設けられた大会初の「ラップチャレンジ(30〜35キロのタイム)」は、そのレベルまで選手の力量が足りていなかった印象を受けた。それに見合った選手が数多くできてほしい。

この数年、日本の女子マラソンの課題として「トラック記録とハーフマラソンのタイムアップ」「速いスピードでの持続能力養成」を提言してきた。2時間19分台で走り五輪金メダリストにもなった高橋尚子、野口みずきらの育ち方、記録レベル、トレーニング法を参考に、新しいアイデアを加えてレベルアップを図らなくてはならない。

(大阪体育大学特任教授)